「まち」に愛着を持つ人
「まち」を暮らしやすくしたいと考えている人
「まち」をフィールドとして行動するボランティア、
市民活動、ＮＰＯに参加している人
「まち」で学ぶ人
「まち」で働く人

それぞれが多様なベクトルを持っています。
その「方向」や「思い」はいろいろあるけれど･･･

みんながつながって動き始めると、「まち」が動き始める―

今月は、その可能性を紹介します。

つながりを大切にした暮らしやすい豊かな地域社会

特集
笑顔と活力のあるまちへ―

―特集　9ページまで―

問合せ　協働推進課　協働推進係☎㉜3810

-1- 地域の資源を持ち寄り、強みを生かし合う

■はつかいち塾の取り組みから

廿日市地区コミュニティ推進協議会、廿日市市郷土文化研究会そして中央市民センターの３つの団体から構成されるはつかいち塾。

従来の縦割りでの行事の開催ではなく、日ごろの活動で培ったつながりを生かし、「街道まつり」の開催に取り組んだ。開催日も含め、他地区や他の団体と協力することで、まつりにより多くの人を呼び込むことができるほか、他地域の地域資源も広くアピールできるというメリットもある。

郷土文化研究会で副会長を務める正木康章さんは、「廿日市は、古くから西国街道や津和野街道と関係が深く、興味深い歴史もたくさんあります。その街道を拠点に、何かできないかと思ったんです」と話す。

まつりの当日は、郷土文化研究会による歴史講座のほか、４００年前に敷かれた石畳が今も残る津和野街道ゆかりの街道弁当の販売や、宿場町廿日市の桶ずし、栗栖子ども神楽団による神楽、地御前餅つき音頭などを披露した。

「お互いの地域の良さを認め合うことで、スムーズに活動することができます。また、地域資源はどこの地域にも必ず存在するものですが、意外と気付かないものなんです。他地域の人に指摘されて初めて自分たちの地域の良さに気付くこともあります」。

先の震災では『絆』という言葉が注目されたが、みんなを結ぶということで『結（ゆい）』という言葉を意識したという正木さん。

「各地域にはそれぞれオリジナルの良さがあります。そして、楽しくないと何にもできません。すべてが一方向に向かって行かなくても、それぞれが目的意識を持って進んでいけば、良いものができると思っています」。

郷土文化研究会では、広島工業大学と連携しiPadを使った歴史散策に取り組んでいる。11月25日、まつりの当日、講師の広島工業大学の三好孝治准教授や学生と一緒に、大正時代の町家地図の入ったiPadを見ながら、まち歩きを楽しんだ。

はつかいち塾
廿日市市郷土文化研究会　副会長
正木（まさき）　康章（やすあき）さん

-2- 専門性と若い力を地域に注ぎ込む

■日本赤十字広島看護大学の取り組みから

廿日市市では、地域社会の発展に寄与することを目的に、４つの大学と包括的・協力協定を締結している。そのひとつ、日赤看護大学では、平成21年に協定を締結し、これまでもさまざまな形でまちづくりに取り組んできた。

同大学がある阿品台地区を中心に、学生が子育てサロンや高齢者のサロンへの参加や家庭訪問などの実習を行っている。

保健師を養成する地域看護学教授の眞﨑直子さんは、「学生たちは、自分たちが地域と大学をつなぐ資源であることを自覚して実習に臨んでいます。地域の人と接することで学生の意識も変わり、住んでいる地域のことも考えるようになりました」と話す。

以前は、地域に出て行くことに不安もあったそうだが、「大学がどういったことをしているか発信し、それを知ってもらうことで、より良い関係が作れていると感じています。学生も地域の目を感じ、地域づくりを学ぶことで『生きた学習』につながっています」。

病院から退院した患者さんが、地域でどのような暮らしを行っているのか、地域での実習を通して理解できた学生もいるとのこと。

「学生たちは過密スケジュールの中、自主的に地域に出ることはなかなか難しいです。しかし、授業として地域での活動のプログラムを計画する仕組みを整えることで、継続性が生まれ、実習終了後も地域に関わり続けたいという積極性にもつながります」。

学生が来てくれることを地域の皆さんも大歓迎しているそう。

「血圧を測るだけの訪問でも、高齢者にとっては普段の生活にメリハリが出たり、また、学生たちもそれを感じたりして、お互いによい刺激になっています」。

12月７日に阿品市民センターで行われた０歳児のママたちの「茶話やか（さわやか）サロン」でのひとコマ。学生が講師となり小さい子が誤飲したときの対処法などを説明した。

日本赤十字広島看護大学
地域看護学　教授
眞﨑（まさき）　直子（なおこ）さん